

保育の一日 (5)

——存在世界としての保育——

津 守 真

二、交わること (つづき)

4 子どもとおとなの葛藤について——

相互性の危機と自我

一日の保育の過程には、おとなの考えと子どもの行為とが葛藤する場面がしばしば生じる。その場合、おとなにとって、自分自身の価値規準しか見えなくなり、それ

に感情的高揚が伴うと、同時にそれに固執する衝動も生じ、自分とは異った他者が共に生活している世界であることを認識できなくなる。そのとき、おとなと子どもとは出会うことができない。子どもはおとなから疎外された状態になる。

保育は、本来、子どもが自分の最善の可能性を發揮して生きることができるようにする営みである。子どもの行為をおとなが否定するところではそれはなしえられないだろう。子どもとおとなとが葛藤するところでも、お

となは子どもの行為に意味を見出し、相互性をもって応答するところに保育がある。

相互性をもって応答するというのは、感情のおもむくままに振舞うことではない。おとなが自分の衝動に任せ叱つたり要求することではないし、あるいはまた、強迫的義務意識にとらわれて、命令したり禁止するのではない。保育者の行為は、いずれの極端に偏るのでもなく、具体的な状況に応じて、保育者自身がよく見て判断し、子どもと共に生活し成長する場をつくるのである。

おとなの本能的欲求も、集団の秩序維持のための倫理も、いずれも人間生活に必要な機能であるが、いずれも人間を全面的に支配するものではない。人は自己の中心を保ち、その両者を使いこなすことによって、人間らしくなることができる。その点からいうならば、おとなと子どもとの間の相互性を可能にするのは、衝動や義務感に自らを委ねるのではない理性的な自我である。

E・H・エリクソンは、相互性 (mutuality) を支える原理として、むかしから多くの社会や文化の中で重んじ

られてきた「黄金律」(Golden Rule) について論じ、相互性における自我の機能の重要性について述べている。^{注1}

「黄金律」とは、「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ」という新約聖書の一節に代表される倫理である。しかしこれはパラドックスを含んだ命題であって、人は互いに異質な独立した人格であるならば、自分がしてほしいと思うことと、他人がしてほしいと思うことと一致するとはかぎらない。そこで、バーナード・ショウが皮肉として「あなたが人からしてほしいと思うことは、他人に対してする^{注2}な」というのも、異質な「他」と世界を共有する際の倫理の一面であろう。他人と自分との区別なく両者を束縛する道徳律は、理性的自我を破壊する力をもつ。そこで、高度に道徳的な人が非倫理的な行為をすることがある。道徳規準に対する偏執と、無制約の本能的衝動とは、表裏をなして同時に存在するものようである。

エリクソンによれば、「高度の道徳原理の名のもとに、あらゆる下劣な復讐、拷問、大量虐殺などが行使されて

きた。そういうことからみると、黄金律は、人を敵の公然たる攻撃から守るのみでなく、友人の正義感から守ることをも意味するという結論に達する。^{注3}人間の心の中で道徳律を代表する超自我の声は、かならずしも残虐であるとはかぎらないが、良き良心のバランスがくずれると、自らに対しても残虐になりやすい。内心の支配者の武器である「恥を知れ」という良心の声が、人間の心の全体を占拠し、それは個人を超えた集団の秩序維持のために、個人を抹殺する力を揮うようになる。個人の無意識の中であって集団に仕える衝動は、強迫的かつ専制的であって、崇高な行為にもなるし、残酷な行為にもなる。エリクソンはこの点に言及し、人が超自我に偏執する傾向は、人間の頭脳が過剰に進化した結果であるとす。過去において、恐竜が本能的衝動を過剰に発達させ、固い殻で身体の表面を過度に防禦することによって滅びたように、現代において、人類は、集団の秩序維持のための道徳意識——超自我——を過度に発達させ、それによって滅亡を招く危機に頻している。正義のために

は、核の使用による大量殺人も是認され、人類全体が亡びることになるかもしれない。他方、この過程で、人は、落着いた理性と、人との間の相互性の愛を失うに至る。これは個人の崩壊である。人は本能的欲望の奴隷になるのではなく、超自我の道徳律に支配されるのでもなく、その両者の中間であって両者を統御できる自我を確立するという課題を負っている。現代において、その必要は一層大きい。

エリクソンによれば、「黄金律」は相互性の原理にひとしい。「真に価値ある行為は、する者とされる者との間の相互性を強める経験であり、その相互性は、相手のみならず自分をも強めるものである。かくて、する者とされる者（他者）とは、ひとつの行為におけるパートナーである。^{注4}このことは、発達と教育の観点からみるならば、子どもがその年齢、発達段階、条件に従って強められるときには、おとなの方も、その年齢、発達段階、条件に従って強められる。このように理解するならば、黄金律は次のように云いかえられる。「他人を強めると共

に、自分を強めることができるように、他人に対してするのがよいことである。すなわち、自分自身の最善の可能性を育てるように、他人の最善の可能性を育てなさい」と。^{注5}

黄金律を論じた長い論文を、エリックソンは、「ゆきて、それを学べ」(Go and Learn it) というタルムードのこ
とばで結んでいる。自我を強めることは、他人の可能性を伸ばそうとする日日の営みの中で学ぶことである。おとなのみでなく、子どもは、赤ん坊のときから、成長の時期に応じた仕方、おとなとの相互性の中で日々学んでゆく。そして、おとなになったときには、次には、自分が子どもを育てる者として、子どもとの間で学びつつける。

神学者北川台輔は、現代の国際社会の中で葛藤する異人種の間の調停に尽くした人であるが、「人格の完成を求めて」という論文の中で、普通に個性化と訳されるインディヴィデュエーション(Individuation)^{注7}という語を、「一人前になる」ということばであらわしている。^{注8}これ

は自己の中心を発見してゆく人間の成長の過程という心理学用語である。北川によれば、一人前の人、すなわち、本当にでき上った人は少ない。「大事業を経営し、幾万の富を蓄えてその敏腕をうたわれながら、異人種を毛虫の如く嫌ったり、ちょっとした事にもすぐ癩癩を起すような人物は『一人前』とは云いかねる」。また、「大学者でありながら、近所の人達や婦人子供とさっぱり折合いのよくない人物も、これまた一人前ではあり得ない」。立派な職業についても、世間体を始終心配して、「自分と自分の家族さえ世の中に迷惑かけずにやって行ければそれで自分の責任は完了したものと考える」のも一人前の大人とは云えない。古歌に「人多き人のなかにも人ぞなき 人と成れ人 人と成せ人」とあるように、一人前の人間になるということは生涯にわたってつづく課題である。北川はこのことを論じて、一人前にある個性化とは、自分一人でなしえられるものではなく、人と人との交わりの中でなしとげられるものであることを強調する。人は「他人との交わりを離れては自ら一人

前人間として生存し得ないという事実⁹に心眼を開いて「人との交わりの価値を知るまでに成人した人間」となり、「何にもまして交わりをとるとぶ所に一人前の人間の奥床しさがある」

しかしながら、この交わりは一方的なものではない。

「これが實際上可能となるためには、人と人との間に先づ平等と独立とがなければならぬ。社会的な地位・階級・職業・学歴・人種・宗教の如何を問わず、一切人がすべて『神の前に平等なる魂』であり、他の何人によっても支配され強制されることのあつてはならない独立人であり、更に各人が神によって良心の自由を与えられた人格であることを認め信じ且つ受諾しなければ、ここに云うところの交わりは成立しない」¹⁰と北川は云う。ここではその宗教的意味についてはこれ以上ふれないが、価値観を異にする異人種間の葛藤の調停に生涯たずさわった著者が、一人の個人の人格の成長に、他人との交わりを尊重する認識が重要であることを強調していることは意味深い。もちろん、その交わりは、ここに述べられて

いるように、独立した個人の存在と同時に対極をなして存在する相互性の交わりである。他人とすべてを共有し、共有せよとする、自他の区別のない集団性とは異なる。P・ティリツヒが、人間の存在における両極性の中に、個人化 (Individuation) と参与 (Participation) を挙げ、この両者はひとつの存在の両極であり、相補的であり、切り離し得ないものであると述べているのも、同様のことと解してよいと思う。相互性を支えるものは、個人の自我のはたきであり、また、自我が育てられるのは、相互性の交わりにおいてである。

保育におけるおとなと子どもとの間の葛藤は、異人種間の葛藤とは比較にならないほど容易であり、また、楽しいものである。しかしその根底にある構造においては、共通なものがある。異質な他者が共に生活するなかで、異った価値をもちながら共存する生活をつくること、またその中から、共存する価値をつくり上げてゆくことである。どんなときにも、子どもが最善の可能性を發揮して生きられるように望み、そのことから目を離さないこ

とである。子ども自身が、おとなと共有する社会の価値を身につけ、更に新たな時代の価値をつくり上げてゆくのは、それによって可能になる。

注1 E. H. Erikson; *Insight and Responsibility*. W. W. Norton& Co. Inc. 1964 VI The Golden Rule in the Light of New Insight.

注2 同書 p. 222

注3 同書 p. 224

注4 同書 p. 233

注5 同書 p. 234

注6 同書 p. 244

注7 個性化は、インソニキティエンソニス C・ユングの人格理論で重要な概念である。

注8 北川台輔「人格の完成を求めて」一九五〇 篠原収二

編「北川台輔さんを偲ぶ」昭49所収

注9 同書 p. 29~p. 30

注10 同書 p. 37

注11 北川台輔(1910~1970)は一九四四~一九五六に、日系米人牧師として米国における日本人、アメリカインディ

アン、黒人問題につくし、一九六〇年より世界基督教協議会より南ア連邦に派遣され、黒人と白人との調停に貢献した。晩年にはラオス、ベトナム問題を手がけた。

注12 P・ティリッピ(P. Tillich 1886~1965)は、現象学の流れを汲む哲学者、神学者で、ロロ・メイの現象学的心理学の形成に大きな影響を与えた。

日本保育学会第35回大会の

お知らせ

期日 昭和57年5月15日(土)、16日(日)

会場 郡山女子大学、郡山女子大学短期大学部

問い合わせは、日本学会事務センター

TEL 03・815・1903です。